第４章　シカ対策の進め方

シカ対策を実行する上で最も大事なことは、その場所でシカ対策を進めることの必要性と目的を明確にすることである。そのうえで、目的を達成するための計画を作成（目標設定）することになる（図 4-1）。更には、全体計画に沿った対策の実行計画を作成し、捕獲や柵の設置を実行していく。そして、それらの効果検証、目標の達成状況の検証を行う。必要があれば全体計画の修正や見直しを行っていくことになる。

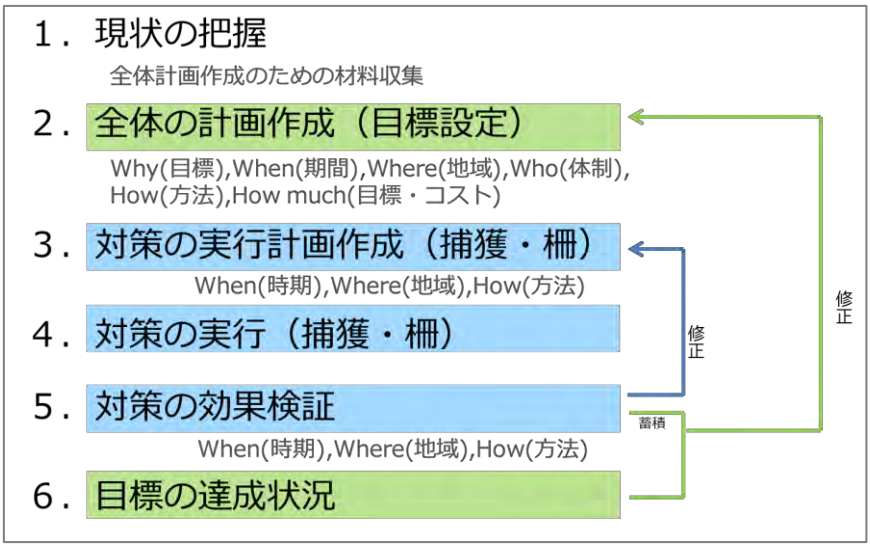

図 4-1　シカ対策の流れ

効率的に捕獲を行うためには、現状の把握が重要となる。現状の把握においては、シカがいつ、どこを利用するかということ（シカの利用状況の季節性、場所（環境）選択）を把握する必要がある（図 4-2）。今回のように対象範囲が限られており、おおよそ全域での調査が可能な場合は、現地調査のデータを元に捕獲場所や時期などの検討を行うことができるが、対象範囲が広い場合には出没状況を網羅的に把握することは難しいため、場合によってはそれらのデータを用いてシカの高密度地域を予測する地図（ポテンシャルマップ）の作成を行ったうえで、利用可能度の把握を進める必要がある（図 4-3）。

また、シカの利用状況の季節性を把握するためには、GPS 首輪による行動追跡、センサーカメラによるシカ密度指標の把握や被害発生時期に関する調査が有効である。

捕獲場所や捕獲時期が絞り込めたら次は捕獲方法選定となる（図 4-4）。捕獲方法はシカ密度や行動特性（警戒心など）によって実施すべき手法が異なってくる。高密度地域では、シカの出没時間帯が日中なのか夜間なのかによって更に捕獲手法が異なってくる。例えば、シカが高密度であり、日中に出没し 1 回あたりの目撃頭数が少ないような場所では、銃器による捕獲が効率的であり、例えば、誘引狙撃、モバイルカリングや忍び猟などの手法が考えられる（奥日光国有林、浦国有林）。このような場所で 1 回あたりの目撃頭数が多い場合は銃器での捕獲はシカをすれさせる可能性が高くなるため、まずは囲いわななどのわなを中

心とした捕獲手法を採用し、銃器捕獲の場合は忍び猟に限定するなどシカの反応を見ながら実行計画を立てる必要がある（黒河内国有林）。

一方で、シカは低密度ではあるが捕獲の必要性がある場合は、人への反応を確認し、人を見ると逃走するようであればわなを用いた捕獲、人に対してそれほど警戒しないようであれば、銃による捕獲（誘引狙撃、モバイルカリング、忍び猟など）ということが選択できる。この際に、各捕獲方法（例えばわなや銃）の実施地域の空間的な配置も考える必要がある。

実際に現場で成果を上げるためには、直前の現場の状況を踏まえて捕獲方法をアレンジできる人材の配置が必要となり、シカの動きにどのように合わせられるかが重要となる。

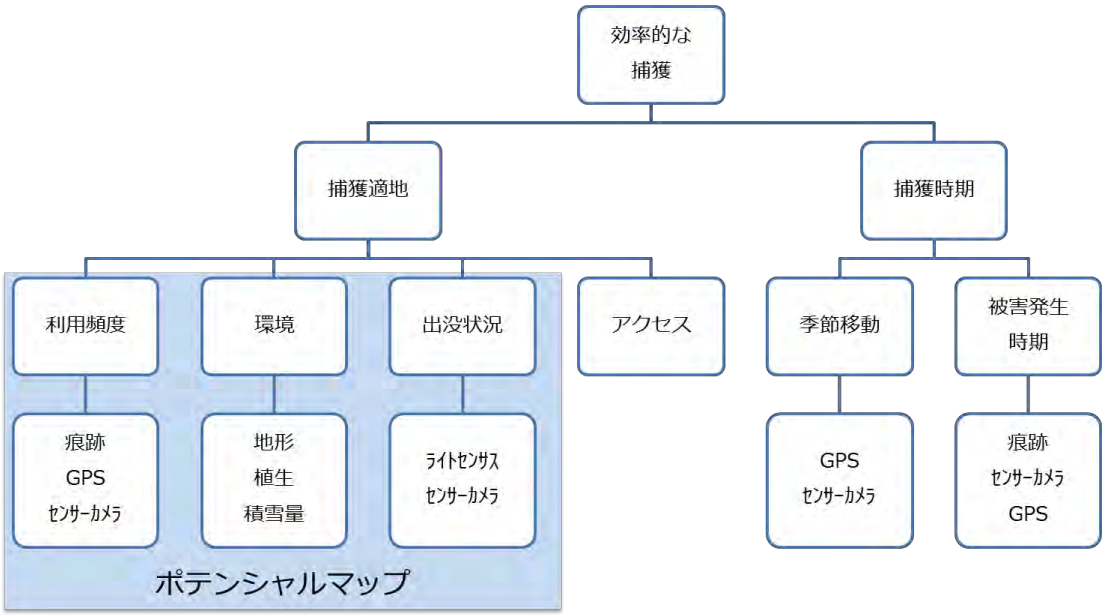

図 4-2　効率的に捕獲を行うために必要な情報

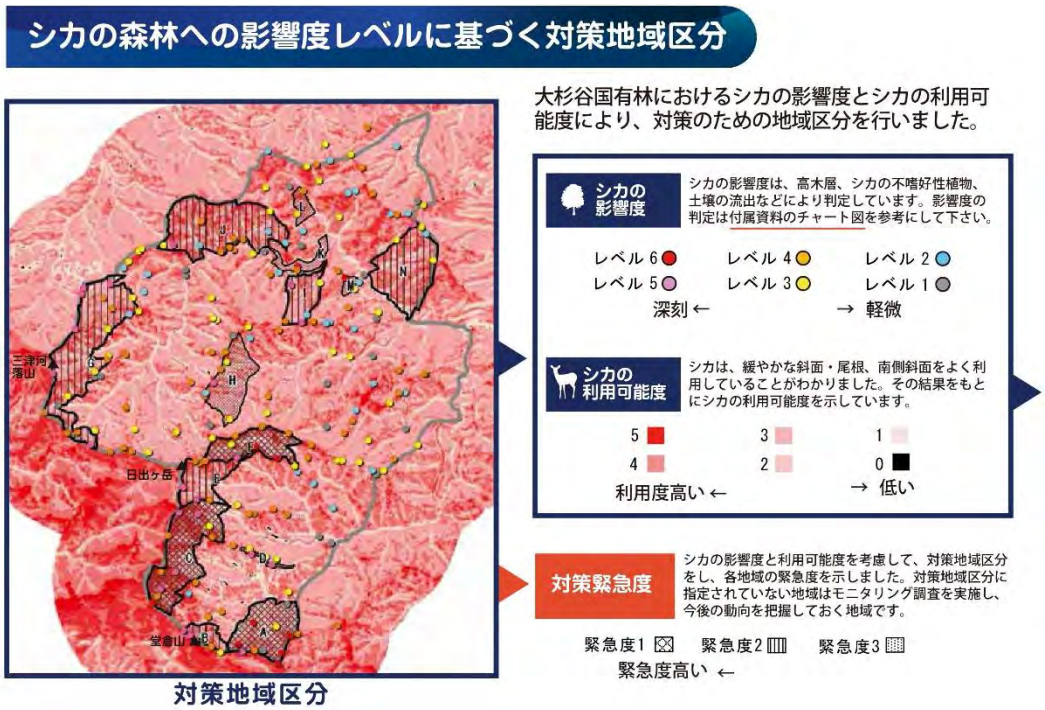

図 4-3　ポテンシャルマップの例（図のシカの利用可能度がポテンシャルにあたる。【大杉谷国有林におけるニホンジカによる森林被害対策指針より抜粋】）

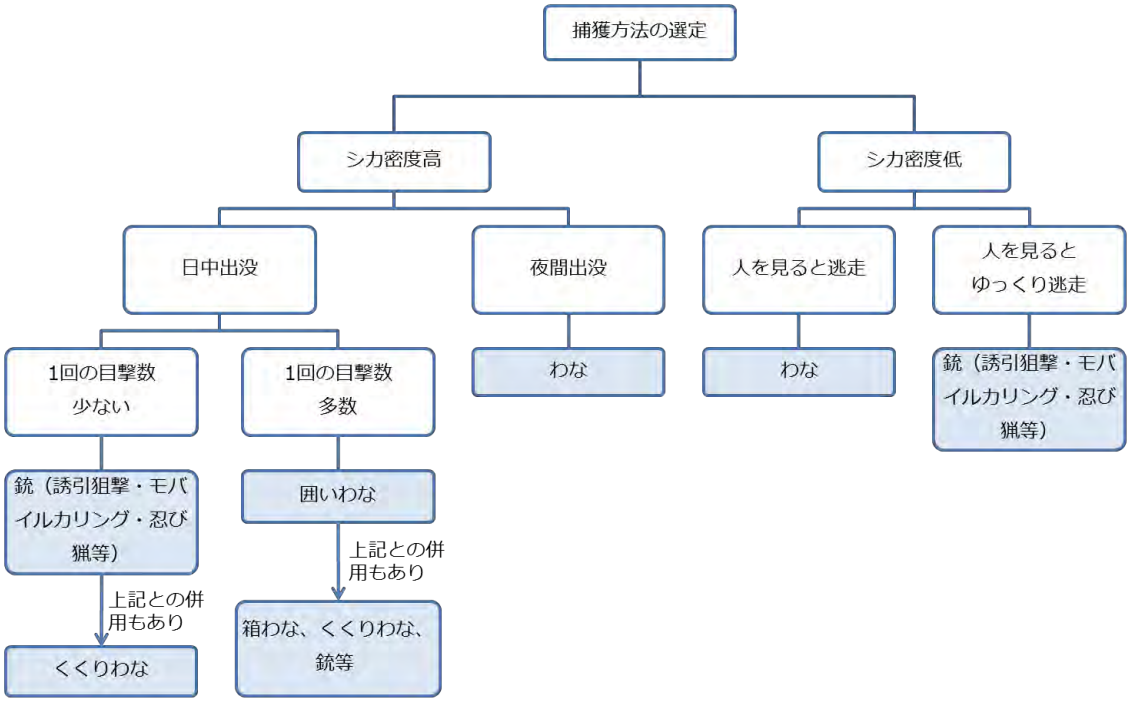

図 4-4　捕獲方法の選定